# 日蓮大聖人御書全集

## 弁殿御消息（べんどのごしょうそく）

## （師弟同心の祈りの事（ていどうしんのいのりのこと））

新版1636～1638

# 弁殿御消息（師弟同心の祈りの事）

建治2年（'76）7月21日　55歳　日昭

滝王家葺由たきおうをば、いえふくべきよし候いけるとて、まかるべきよし申し候えば、つかわし候。

右衛門大夫殿替銭えもんのたゆうどののかえぜにのことは、大進阿闍梨の文ふみに候らん。

一、十郎入道殿の御けさ、悦び入って候よし、かたらせ給え。

一、三郎左衛門殿さぶろうざえもんどのの、このほど人をつかわして

候(そうら)いしが、おおせ仰候(そうら)いしこと、あまりにかえすがえす返返覚おぼつかなく束候(そうろう)由よし、わざと御(おん)わたり渡ありて、きこしめし聞書てかきつかわし遣候(そうろう)べし。また、さえもんどのにも、かくと候(そうら)え。

河野辺殿(かわのべどのとう)の四人(しにん)のこと、はるかにうけたまわり承候(そうら)わず。おぼつかなし。かの辺(へん)になに何事(ごと)か候(そうろう)らん。一々(いちいち)にかきつかわせ遣書(たびたび)。度々(たびたび)この人々(ひとびと)のことは、ことに殊一大事(いちだいじ)と天(てん)をせめまいらせ責候(そうろう)なり。さだめて、後生(ごしょう)はさておきぬ、今生(こんじょう)にしるしあるべく候(そうろう)と存(ぞん)ずべきよし、したたかにかたら由強語験

せ給え。

伊東八郎ざえもん、今はしなののかみは、げんにしにたりしを、いのりいけて念仏者等になるまじきよし明性房におくりたりしが、かえりて念仏者・真言師になりて無間地獄に堕ちぬ。のと房は、げんに身かたで候いしが、世間のおそろしさと申し、よくと申し、日蓮をすつるのみならず、かたきとなり候いぬ。しょう房もかくのごとし。

おのおのは随分の日蓮がかとうどなり。しかるに、なずきをくだきていのるに、いままでしるしのなきは、この中に心

翻ひとあ覚そうろう思合ひと
のひるがえる人の有るとおぼえ候ぞ。おもいあわぬ人を
祈みずうえひ焚そら家造
いのるは、水の上に火をたき、空にいえをつくるなり。こ
よししにん語たも蒙古こく合
の由を四人にかたらせ給うべし。むこり国のことのあうを
思にちれんとが
もっておぼしめせ。日蓮が失にはあらず。
筑後ぼうさんみ帥とう暇
ちくご房・三位・そつ等をば、「いとまあらば、いそぎ来
だいじほうもんもう語たま
るべし。大事の法門申すべし」とかたらせ給え。
じゅうじゅうびばしゃとようもん大ちょうそうろう真ごん
十住毘婆沙等の要文を大帖にて候と真言の表の
消息うら佐渡ぼう書そうろう総おもて
しょうそくの裏にさど房のかきて候と、そうじてせせと
書付そうろう軽取給そうら紙かみ
かきつけて候もののかろき、とりてたび候え。紙なくし

て一紙(いっし)に多人(たにん)のことを申(もう)すなり。

七月二十一日(しちがつにじゅういちにち)

弁殿(べんどの)

日蓮(にちれん)　花押(かおう)